

泣ける純愛寝取られ

僕のお嫁さんになると
言ってくれた幼馴染みが
知らないおじさんの
子供を産むまで

八ヶ岳昌司

自分で自分の恋人を自慢するのも何ですが、茉奈美(まなみ)は美人です。かといって決して派手ではありません。

控えめで真面目な性格で、人よりも目立つということがないため、美人ではあるのですが、男の注目を集めるということもなく、友人たちのグループの中で、いつも控えめに、目立たない位置で微笑んでいます。

それは、茉奈美が小学生の時から、二十歳になった今でも変わりません。

私たちは幼なじみです。

小学校の低学年の頃に同じクラスになり、仲良くなった私たちは、家が近所だったこともあり、いつもお互いの家に遊びに行つては、テレビを見たり、ゲームをしたりしていたのです。地方の小さな町だったこともあり、自然と家族ぐるみの付き合いになり、一緒にスキーに行ったり、誕生日会に招かれてケーキをごちそうになったりしていました。

あの頃、茉奈美は、「大きくなったら正行くんのお嫁さんになる」と無邪気に言っていました。

今となつては懐かしい思い出です。

そんな茉奈美と私も、中学生になると、お互いのことを意識し、子供の頃のように遊んだり

することもなくなりました。

互いに体が成長し、中学校での生活が始まって部活動や勉強などが忙しくなると、小学生の時のような交流はなくなり、自然と違うグループで生活するようになりました。

けれども、中2、中3と私は茉奈美と同じクラスになって、お互い見知った仲であることから、普通に会話はしていて、クラスの女子の中ではやはりいちばん距離の近い存在でした。

二人は仲の良い友人といった感じで、そこに特別な感情とか、特別な関係はありませんでした。

けれども、本当は私は、茉奈美のことがずっと好きだったのです。

中2でクラスが同じになり、髪が伸び、胸が大きくなった茉奈美を見たときから、私の頭の中は茉奈美のことではいっぱいだったのです。

けれども私は、スポーツも苦手でそれほど顔もよいわけではなく、中学では真面目だけど不器用でオタクなタイプというポジションだったので、自分に自信が持てず、茉奈美に告白したり、恋人として付き合うといったようなことは考えられなかったのです。

私たちの地元は、東北のとある田舎の小さな町でしたが、そんな田舎の学校でも、中学になると、誰と誰が付き合ったりとか、告白したり、そういう噂が流れたり、嫌でも男女の関係と

いうことを感じるようになってきます。

私は、次第に美人になっていく茉奈美のことが心配で仕方がなく、早くしなければ、誰かに茉奈美を取られてしまうのではないかと心のどこかでおびえていました。

けれども茉奈美は、学校の中でも目立つことはなく、中3の時には学級委員をやるなど、真面目なキャラだったため、誰かに告白されたり、誰かと付き合うといったこともなく、私たちはただの仲の良い友人でいることができたのでした。

そして私たちは同じ高校に進学しました。

私たちの住む県でも有数の進学校で、成績の良かった茉奈美と、真面目だけが取り柄の私は、揃ってその高校に入ることができたのです。

高校に入ってから、私は気持ちを入れ替えて勉強に取り組むようになり、その学校でも、次第にトップクラスの成績を取るようになりました。

私は理系で、茉奈美は文系だったため、高校のクラスは一緒ではありませんでしたが、同じ吹奏楽部に所属し、毎日のように茉奈美と顔を合わせて、私は幸せでした。

そして、ようやく自分に自信が持てるようになった私は、高校生活も3年目に入ってから、ついに茉奈美に告白したのです。

昔から知っていて、普段も普通に会話をしている茉奈美に告白するのは変な感じでした。

「本当に、私で、いいの？」

私が告白すると、茉奈美は普段とはうってかわって、急に恥じらうような態度になり、私が、ずっと前から茉奈美のことが好きだった、自分が付き合いたいのは茉奈美しかない、と言うと、困ったように目をきよきよさせ、そして私の方を見ると、

「よろしく願います」

と言ったのでした。

その様子は、私がそれまで見た茉奈美の中でいちばん可愛い茉奈美で、それは私のいちばん幸せな瞬間でした。

そして私たちは付き合い始めたのです。

それは、高校3年の夏のことでした。

付き合うとはいっても、田舎の真面目な進学校の生徒の私たちです。

都会の人たちや、普通の今時の人たちであれば、もっと派手な付き合いができるのでしょう

が、私たちは、一緒にデートで町に出かけたり、映画を見たり、食事をしたり、そういった普通の地味なデートをしていました。

それでも、茉奈美と手をつなぎ、笑い合っていると、心の底から幸せでした。

そして、茉奈美も幸せそうでした。

真奈美は高校に入ってから、さらに美人になり、進学校のブレザーを着ていても、町では男の人やおじさんに時々声をかけられていました。

高2のとき、吹奏楽の大会の後、茉奈美は明らかにヤンキーのような不良から声をかけられていたことがありました。明らかに場違いなその不良に、しつこく声をかけられている茉奈美に、私は茉奈美がどんな男にとっても魅力的な、引く手あまたの美人であることを改めて感じたのです。

そんなことがあっても、茉奈美はこれまで、誰とも付き合うこともなく高校生活を送っていました。

勉強が第一の真面目な進学校の生徒なので、それは別に不自然なことではありませんでしたが、それでも私は、茉奈美がずっと私のことを待っていてくれたのだと感じ、嬉しい思いだったのです。

そして、そんな美人の茉奈美が自分の隣にいることに、私は誇らしく幸せな気持ちでした。

それは、十一月のことでした。

高校3年の私たちは、受験勉強も佳境を迎え、大変な時期にさしかかっていましたが、だからこそ、今のうちにデートをしておこうと思い、私たちは週末に、少し遠くにデートに出かけたのです。

土曜日の朝、私たちはバスに乗り、半島の方へと出かけました。

そこは景色の名所として、また自然がたくさんある場所として有名で、私たちはそこに、二人できれいな思い出を作ろうと出かけることにしたのです。

バスに2時間近く揺られて、私たちはその場所に着きました。

バスを降りてから、さらに30分ほど歩き、私たちはいくつもの小さな島が見える場所に来ました。

「かわいい」

小さな島が海にいくつも浮かんでいる景色に、茉奈美が興奮しています。

「ねえ、あそこに行こう！」

茉奈美は、少し先にある、木がこんもりと茂った島を指して言います。

島までは橋がかかっており、その長い橋を歩いて私たちは行くことになりました。

ポニーテールに束ねた長い黒髪をはずましながら、パーカーを着込んだ茉奈美は、先にたつて橋を渡り出し、時々私の方を振り返っては笑います。

付き合うようになってから、茉奈美は私に無邪気な面を見せるようになりました。

中学、高校と、学校では真面目で控えめな優等生キャラだった茉奈美。

けれども、その中身は、小学生の頃から変わっていないのです。

そのことに、私は茉奈美と付き合うようになってから気付きました。

周囲の男性が振り返るような美人になっても、茉奈美の中身は、私のお嫁さんになりたい、と言っていた小学生の頃から変わっていないのです。

そして18歳になった今、茉奈美は再び、「正行くんのお嫁さんになりたい」と言ってくれているのです。

橋を渡りながら、遠くから機械の音が聞こえ、私は振り返ると、遠くの対岸で工事が行われているのに気付きました。

海を隔てて、2、3キロほど先でしょうか。

この地域は災害に見舞われたので、その後、復興の工事が行われていることは私たちも聞いていました。

被害にあった海外線の地域を復旧するため、たくさんの工事が行われ、県外からも業者や作業員の人々がやってきているのです。

これはそういった工事のひとつなのだろうと、私は思いました。

1キロ近くもあるコンクリートの橋をやつと渡り終え、私たちは島に着きました。

そこは木が生い茂っているだけの、何も無い小さな島で、岩に囲まれた海岸線をたどれば、歩いて一周できてしまいそうなくらいでした。

そして私たちは岩場を歩いて、島の反対側まで歩いていったのです。

十一月の始めで、もうかなり寒い季節でしたが、この日は暖かく、陽射しもきれいで、島から見る景色は最高でした。

海を見ながら、岩場に二人で座り、言葉を交わすこともなく、手を握り合って、私たちはしばらく寄り添っていました。

周囲には人も居らず、まるでこの島が二人だけのものになったみたいです。

私たちは言葉もなく、どちらからともなく見つめ合うと、顔が近づき、そこで初めてのキスをしたのです。

小学生の頃からの幼馴染みとはいえ、付き合ってから3ヶ月がたつてやっとキスを交わした私たち。

今時の常識でいえば、とても奥手ということになるでしょう。

けれども、それは私たちには幸せな瞬間でした。

どのくらいそこに座っていたでしょうか。

私たちは、いつのまにか日が傾いていることに気付いて、帰ることにしました。

岩場を立つた私たちは、そこに島の真ん中を通る山道があることに気付き、そこを通って戻ることになりました。

自然の中の山道なので、細く、草も生い茂って、地面もでこぼこで歩くのが大変です。けれども、岩づたいに島をぐるっとまわって戻るよりは、近いと思ったのです。

整備されていないでこぼこの山道、それも島を登る上り坂だったので、思いのほか時間がかかってしまいました。

島の真ん中あたりと思われるてっぺんにやっとたどり着き、私たちはそこに、小さな小屋があるのを見つけました。

それは、工事現場にあるような、プレハブというのか、トタン屋根の仮設の小屋で、山の中にあるからなのか、あまりきれいとは言えません。扉は締まっていて、人の気配はありません。窓は泥ですすけていますが、そこから見える小屋の中は閑散として、あまり人の出入りがない感じがしました。

早く戻らなければと思いつつも、私たちは、その小屋に入ってみることにしました。

それは、トイレに行きたかったからです。

肌寒い中、何時間も散策して、私たちはトイレに行きたかったのですが、いくら誰もいない山道といっても、恋人の目の前で、トイレのないところで用を足すのは嫌でした。そこで、この小屋のトイレを借りようと思ったのです。

「すみません」

声に出してドアを開けつつ、私はもし人がいたらどうしようと思っていました。

人の気配はないものの、こんな周囲に誰もいない山の中で、人と、特に男性と出会うのは少し嫌だったからです。

それは、茉奈美のようなかわいい女の子を連れているからです。

「誰かわいせんか」

人気のない小屋の中で呼びかけつつ、私の中に緊張が走りました。

もし誰かいて、トイレを貸してください、なんて言ったら、その人が男性だったら、茉奈美を見て、変な想像をするのではないかと思いました。

私の頭の中に、さきほど見た対岸の工事現場のことが思い浮かびました。

もしあの工事現場の作業員の人が、私たちが島に渡っていくのを見ていたら、そして、その人たちが、茉奈美を襲おうと思ったら。誰もいない、逃げ道のない小さな島です。作業員の男性が何人かで連れ立って島に来たら、私は茉奈美を守れるでしょうか。そして、もし守れなかったら……。

一瞬のうちに、私はそこまで想像し、唾を呑み込みました。

しかし、小屋の中は無人で、私の声に返事をする人はいませんでした。

小屋は、十畳ほどの閑散とした事務所兼住居のような山小屋で、おそらくは一年のうち半分以上は使われていないのでしょう。

小さな事務機と、座布団がいくつか、土で汚れた絨毯の上に置かれています。奥には石油ストーブと、灯油が置かれてあり、ちゃんとトイレもありました。電気は点きませんでしたが、小さなキッチンがあり、水道は出るようです。こんな離れた小さな島でも、水道が出ることには驚きましたが、ノドがかわいていたので、茉奈美と二人で水道の水を少し飲みました。トイレは和式でしたがきちんと水が流れ、安心した私たちはようやく用を足すことができました。

ほっとして一息ついたからでしょうか。茉奈美がトイレから出てくるのを待ちながら、私は少しずつおかしい気持ちになっていました。

私は、もしここに人が、男性がいたら嫌だと思いましたが、逆に言えば、ここは周囲に人はいません。さきほど私は、茉奈美が男性に襲われたらどうしようと心配しましたが、それはつまり、自分が今、茉奈美を好きにできるということです。この誰もいない山の中の小屋で、茉奈美にエッチなことをしても、誰にも見られることはないでしょう。こんなチャンスは、なかなかないように思えてきました。

真奈美がトイレから出てきて、急に、その季節外れのショートパンツからのぞく白い足が、

まぶしく思えました。

明かりのない小屋の中、夕方の薄暗い光の中に、真奈美の身体が急に生々しく感じられます。163センチの、すらりとしたほどよい身体に、グレーのパーカーの下にある、ボリウムのある胸のふくらみ。ポニーテールにした黒い髪は、肩の下まで伸びて、スポーティーで健康的な印象です。そして、ショートパンツから伸びる太ももと、その上にあるお尻。中学のときから、ずっとあこがれていた真奈美の身体なのです。

私が唾を呑み込むのが真奈美にも聞こえたのでしょうか。

「どうしたの？」

やさしい声で真奈美が聞くと、私は、キスしたい、と伝え、誰もいない山奥の小屋の中で、私と真奈美は二度目のキスを交わしました。

キスをしながら、私は真奈美を抱きしめ、私は体が熱くなり、幸せでいっぱいになりました。真奈美も私を抱きしめてくれているのがわかります。

「真奈美、好きだよ」

「まさくん、私も。大好き」

初めて、こんなにも抱きしめ合って、それまで、デートの時も手をつなぐだけだった私たち

は、この山奥で、二人の仲が進展していくのを感じました。

そして私は、茉奈美と抱き合いながら、知らないうちに茉奈美のお尻をさわりはじめました。私の手が下の方に伸びても、茉奈美は何も言いません。

私は、初めてさわる茉奈美のやわらかいお尻の感触に感激しつつ、満員電車で痴漢が女性の尻をさわる理由がよくわかったと思いました。

茉奈美と抱き合い、お尻をさわって、私は自分の股間が固くなっているのがわかりました。

それは抱き合っている茉奈美にも伝わっているはずです。

それでも茉奈美は嫌がることなく、ぎゅつと私を抱きしめて、キスを続けています。

私は、茉奈美が自分に身をまかせてくれているということがわかって、なんともいえない甘い思いに包まれました。

そのまま、何十分も抱き合っていたでしょうか。

私はキスをしながら、ずつと茉奈美のお尻をなでていました。もちろんそれは、ショーツパンツの上からですが、時折ショーツパンツの下のすき間から指を忍ばせて、茉奈美の下着の感触を楽しみました。

そのまま行っていたら、私たちはこの時この場でもっとエッチなことをして、セックスをし

ていたかもしれません。

けれども、唐突に茉奈美が言いました。

「あ、雪だ」

見ると、窓の外に、雪が降っています。

「大変」

天気予報はあてにならないということを、私は思い知りました。

予報では、今日一日はあたたかく、明日の日曜日には急に冷え込むという予報だったのですが、それよりも早く天気が変わり、雪が降ってきたようです。山と海の天気は変わりやすいということ、私は思い知りました。

「寒い」

茉奈美が言います。パーカーの下は着込んでいるのですが、下はショートパンツなのだから当然です。

「早く帰らなくちゃ」

私はそう言う、小屋を出て、急いで茉奈美と二人、山道を下り始めました。

20分ほど歩いて、やっと島の端っこにたどり着き、細いコンクリートの橋を渡って戻る

頃には、時刻は夕方の5時を過ぎていました。

雪はどんどん激しくなっています。

日も暮れて暗くなる中、私と茉奈美は、バス停に向かって歩きだしました。

けれども、すぐに、それどころではなくなっていました。

雪が吹雪になり、前も見えないくらいの大雪になってしまっただけです。

知らない山道で、歩いて30分もあるバス停まで、この雪の中で歩いていくのは無理に思えました。

事前に調べた時には、この地域を出る最後のバスの時間は6時でした。

今、時刻は5時半になり、この雪の中では、それまでにバス停にたどり着ける望みはかなり薄いです。

今になって、山小屋の中で一時間近くも過ごしていたことが悔やまれました。あの小屋の中、私が茉奈美にエッチな思いを抱かずに、すぐに戻っていれば、バスに間に合っていたかもしれないのです。

皮肉なことに、それは、十年に一度と言う記録的な大雪でした。

近年の異常気象で、不安定な寒気が流れ込み、東北から関東にかけて突然の大雪をもたらしたということでした。

しかし、突然、山の中で吹雪に巻き込まれた高校生の私たちに、そんなことはわかるはずもなく、ただ困惑するだけでした。

どれだけ待っても、雪は弱まる気配はありません。

山道の木の下に逃げ込んで、雪から避難しましたが、ショートパンツ姿の茉奈美はこのままでは凍えてしまうかもしれません。

私たちは携帯電話を見ましたが、海岸の地域のせいなのか、大雪の影響なのか、電波はまったく入りませんでした。

時刻は6時を過ぎました。

寒さで涙目になっている茉奈美の姿に、私は勇気を持って、さきほどの島に戻り、山頂の小屋に行くことを提案しました。

少なくともあの場所なら、雪と寒さから身を守ることができるからです。

この吹雪の中、あの長い橋を渡って島に戻るのは、それだけでも賭けのように思いましたが、この人気のない山道であってもなく迷うよりは、その方が確実に身を守る方法に思えました。

幸い、吹雪が少しだけ弱まり、視界がいくぶん良くなりました。
そして私たちは、暗い中、携帯電話の明かりを頼りに少しずつ進みながら橋を渡り、一時間近くかけて、さきほどの山小屋に戻ったのです。

（体験版ここまで）

© 八ヶ岳昌司 2018年

ホームページ寝取られと純愛

ntlove.com